

## LGBT フォーラム～ありのままの自分で生きられる社会をつくるために～開催報告

【日時】令和元年 11月20日（水）13：00～16：30

【場所】長崎大学文教キャンパス 中部講堂

【プログラム】

1. 開会挨拶
  2. 講演：「児童・青年期における性的指向と性別違和」を学ぶ  
講師：日高庸晴氏（宝塚大学看護学部 教授）
  3. パネルディスカッション  
パネリスト：儀間由里香氏（Take it！虹）  
健崎まひろ氏（佐賀大学 CARASS）  
晃 眞智子氏（LGBT の家族と友人をつなぐ会）  
石川千津子氏（株式会社ウェディング石川）  
コーディネーター：中島ゆり（ダイバーシティ推進センター副センター長 准教授）
- 【主催等】主催：長崎県、長崎県教育委員会 共催：長崎大学  
【参加者】303名参加



【開催内容】

### 1. 挨拶

長崎県県民生活部長から、性的少数者の人権問題は国内外で大きな注目を集めている。国や民間のシンクタンク等の調査によると、日本の性的少数者の方は人口の8～9%とされている。しかし十分な理解がされず、偏見の目で見られたり差別を受けたりすることを恐れ、誰にも相談できずに孤立化し、精神的に生きづらさを感じている方々がいる。県においては、ぬくもりと心の豊かさが実感できる人権尊重社会の実現を目指して、長崎県人権教育啓発基本計画を策定し、女性・子ども・高齢者・障がいのある方などの人権と同様に性的少数者の人権についても重要課題と位置付けて、教育・啓発などの施策を進めている。昨年度からは、性の多様性についての理解促進に特化した事業も実施しており、今年度はこのLGBT フォーラムの開催をはじめ、性的少数者に関するアンケート、性の多様性についての啓発ハンドブックの作成などに取り組んでいる。

企業や行政、教育関係者や県民のみなさま、将来を担う若い方、特に大学生のみなさまが、この機会に性の多様性を身近なものとして捉え、ありのままの自分で生きられる社会を実現していくために、社会の一員として何ができるのかを一人一人に考えていただきたい。本フォーラムが性の多様性についての理解を深め、互いの性のあり方を認め合う社会の実現に向けての一路になることを祈念する旨の挨拶がありました。



### 2. 講演

数多くの社会調査を実施し豊富なデータ分析に基づく講演を全国各地で行われている日高庸晴教授に、「児童・青年期における性的指向と性別違和」と題し、講演いただきました。

性的指向と性自認に関する国の動きから、LGBT・性的マイノリティについてわかりやすく説明されたあとに、性的指向や性自認に係る児童生徒向けの学校の支援の事例等を話されました。LGBTをはじめとするセクシュアルマイノリティ約1万5千人を対象にした2016年に実施した国内最大規模の全国調査の結果から、学校生活におけるいじめ被害率やその内訳、いじめ被害経験者のわずか13%だけが、いじめ解決のために先生が役立ってくれたと認識していることや、親へのカミングアウトの状況についても説明されました。

性的指向や性別違和を知らなければ支援できないというのではなく、多様性を尊重する環境を整備すること、それ自体が支援になると強く述べ、「伝えなければ伝わらない」心の中で応援するだけでなく、メッセージを言葉にして届けることが重要であり、学校でも職場でも言葉にしてほしいと締めくくられました。

### 3. パネルディスカッション

『「ありのままの自分で生きられる社会」をどのようにつくっていけばよいのだろうか』をテーマに、当事者、支援者、企業それぞれ 4 名のパネリストが登壇し、コーディネーターの本センター副センター長である中島ゆり准教授の進行のもと、それぞれの思いを語り現状や課題、ありのままの自分で生きられる社会づくり等について、ディスカッションが行われました。



コーディネーター：中島ゆり准教授      アドバイザー：日高庸晴教授

パネルディスカッション

- ▶ アルバイト先でカミングアウトし、通称名を利用している。佐賀大学においては、2018年1月に相談し、2020年度から通称名の利用ができるようになる予定
- ▶ 災害時の避難等にダイバーシティの観点を取り入れるよう検討している
- ▶ 性に関わらず皆が安心して暮らせる街づくりができればよい。皆が想定する『みんな』とは誰なのか。皆に入らない人は誰なのか…それらも考えながら活動をしていきたい。
- ▶ 「当たり前とは何か」自分の当たり前と人の当たり前は違う。
- ▶ 特別扱いを望んでいるのではなく、みんなが平等に公正に扱われる社会になってほしい。
- ▶ 支えられる存在ではなく、支え合える存在、仕組み作りをしていきたい。この長崎で、皆が安心してより良く生活できるような地域づくりをしていきたい。
- ▶ 企業が取り組む流れとして、LGBTの言葉を知る、LGBT等とは何かを知ることからはじめて、企業内の理解を推進し、トイレや更衣室等環境面の整備を進めていくことが必要だと思う。そのため、LGBT等に関する勉強会を実施したところである。
- ▶ 企業として取り組みを始めたきっかけは、1人の学生アルバイトが辞めた後、社長あてに送った手紙からである。アルバイトで来ている際は全く知らなかった。アルバイトで来ている際に気付くことができなかった、理解していなかった自分たちにショックを受け、取り組みを始めた。
- ▶ 相談を受けた人は、当事者からの信頼を受けたことを受け、何故自分に言ってくれたのか、本人がどこまでまわりに言っているか、情報共有する場合は当事者に確認しながら行動する。当事者が理解してくれる人がいることで、アウトィングする場合は、学校全体で性の多様性の学習をして、それからみんなに公表できるか確認する。自分の想像しないことが起きるかもしれないことも伝えておく。
- ▶ 研究結果を施策に反映させることが必要だ。国が出す公の文章に一言入るだけで取り組み方が大きく変わる。国→県→市町村や学校、企業へと拡がる。
- ▶ 世の中をつくるのは人。理解が不足する現在は組織のトップの判断で進めることがまだまだ有効・必要である。トップからの該当するポジションへの働きかけが必要で、一步踏み出すきっかけを作ることが大事。
- ▶ 企業名が出ると、メディアの詮索がはじまる。実際に、LGBT等に係る学習会をしているかもしれないが、それを大々的に発表していないところもあると思う。

最後に長崎県県民生活部人権・同和対策課長から、本日の講演を振り返って、貴重なご経験・ご意見等心に響

くものあったとの感想が述べられました。また、ご出席の皆様に謝辞が述べられ、閉会となりました。